アーネストファンタジー

コメットフィッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アーネストファンタジー

【Ｎコード】
Ｎ３８１６Ｃ

【作者名】
コメットフィッシュ

【あらすじ】
高校生が異世界に迷い込んだ話。自分の特技を活かし、仲間たちと協力しながら冒険するストーリー。リアルな異世界なので魔法などは無く、死んだら生き返りません。

リアルな異世界

果てしなく続く、荒野。赤茶けた乾いた大地と、同じように乾いて見える、それでも青く透きとおった薄い青空。

僕が最初に見たのは、そんな風景だった。

やけに太陽の光がまぶしくて、それで目が覚めた。ってことは、僕は寝ていたのか。どうしてだか、記憶がなかった。

「…何？ここ」

とりあえず、腕をかざしてみる。腕についていた乾いた土が、パラパラと落ちてきて目に入った。なんだか、体の下がジャリジャリする。無意識に握った手につかんだものは、やっぱり乾いた赤土だった。

ついさっきまで何をしていたかを思いだすことができない。それでも、僕はのそのそと起きあがった。自分の体を、あちこち触ったり動かしたりして確認したけれど、どこも怪我はしてないみたいだ。

朝、着ていた制服はそのまま。ただし、このうえなく汚れていた。それも当たり前。だって、こんな赤土だらけのところに倒れてたんだから。

なんとなく、ブレザーのポケットを探ってみる。生徒手帳、ケータイ電話。残っていたのは、これだけ。持っていたはずの鞄は、どこかに消えてしまったようだ。でも、それも当然のような気がした。だって、ここはどう見ても僕が今まで住んでいた街とはようすが違うのだから。

何となく予感はしてたけど、ケータイは壊れていた。壊れていたっていうか、反応しない。電池は充電したばっかりだったのに…。電源も入らないなんて。

それから、普段は胸ポケットに入りっぱなしの生徒手帳を開いてみる。僕は、わけもなくどきどきしていた。ケータイと同じように、生徒手帳にもなにも書いていなかったらどうしよう。高校生の僕に

とって、身分証明書は生徒手帳だけだった。馬鹿な話だけど、そこに僕の名前が書いてなかったら…って思うと少し怖くなった。
そろそろと裏表紙をめくって、そして僕はため息をついた。あった。僕の名前。
味もそっけもない、ゴム印で押された僕の名前。麻木龍也（あさきたつや）。眠そうな顔で写っている、証明写真。間違いなく、見慣れた僕の顔だった。
「よかったぁ」
僕は、深呼吸しながらもう一度大の字に寝転がった。どうせ、もう体中汚れてるんだ。これ以上汚くなったって、構いやしない。相変わらず太陽の光がまぶしくて、でも暑いくらいに燦々（さんさん）と僕の上に降り注いでくれる。…ありがた迷惑な話だ。
それにしても、ここはどこなんだろう。ようやく、僕はここがどこで、自分がどうなったのか考えてみようと思えてきた。わかっているのは、ここが自分が住んでいた場所ではないということ。それから、ここには自分以外誰の気配も、もしかしたら小さい虫の気配さえないかもしれないってこと。
よかったぁ、ってさっきは言ったけど、ちっともよくなんかない。僕は、少しだけ自分の脳天気さに呆れてしまった。僕はどうしてしまったんだろう。僕がどうしてこんなところにいるのかもすごく疑問だったけれど、それ以上に何の恐怖も感じていない自分にはもっと疑問を感じる。僕って、こんな人間だったっけ？
「よいしょ…っと」
反動をつけて、起きあがってみた。今度は完全に立ち上がって、百八十度見回してみる。本当に、何もない景色。青い空と、赤茶色の地面がどこまでも続いてる。ところどころ、やっぱり赤茶色の丘みたいなところが見える。そんな中に、ぽつんと突っ立っているのも、僕的にはすごく奇妙なことだったけれど、変に僕は落ち着いている。というか、この状況を客観的に外から眺めている自分を感じる。すごく、すっごく変だった。

ま、いいか。考えてもしょうがないことを考えることほど、無駄で馬鹿げた話はないから。僕は、肺にいっぱい空気を吸い込んだ。

「おーい、だれかー！」

試しに、できる限り大声で叫んでみた。どうせ、返事なんて返ってこないとは思ったけど。予想通り、聞こえてきたのは風の音だけ。そういえば、ここは風も強い。時々、大量の砂埃をまきあげて、それを運んでいくように僕の頭上を通り過ぎていく。

仕方なく、僕は歩き出すことにした。こんなところにずっといたって、餓死する前にカラカラにひからびてしまう。人間の体は水分からできてるんだって、こないだ生物の授業で言ってたな、なんて思い出しながら、僕は当てもなく歩き始めた。

結構な時間歩いたような気がしたけれど、やっぱりまわりは荒れた土地だった。それでも、最初にいた場所とはちょっとずつ雰囲気が変わって来たような気がする。どれだけ時間が過ぎたかと思って腕のG－ショックを見たけど、おかしなことに時計もだめになってるみたいだった。

「おいおい、マジかよ…」

お気に入りの時計まで壊れてしまって、僕は自分でもかわいそうになるくらい情けない声を出した。思わず、僕はしゃがみ込んだ。ため息をついた僕の視界に入ったのは、初めの頃よりずっとのびた自分の影。ふと見上げると、あれだけ我が物顔に光り輝いていた太陽が、ちょっとだけ元気をなくしたように見えた。日が傾いているのかもしれない。ってことは、それだけ時間が過ぎたってことだ。

リアルな異世界（後書き）

文書作成は友人がしているので、少しでも続きが気になる人は、「気になる」とコメントを入れてもらえれば幸いです。一件でもコメントがあれば友人に頼んでみたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3816c/

アーネストファンタジー

2010年10月10日14時14分発行